

## 【読楽】018 「武小学」を読む \* 読楽箇所＝序文および第1篇「教育」

### 【概要】

【判型】大本1冊。原寸縦265mm。

【作者】伊南芳通いなよしみち作・序。

【年代等】貞享3年(1686)春序・刊。[会津]刊行者不明。

【備考】分類「教訓」。会津藩士・兵法家の伊南芳通いなよしみちが貞享3年に藩士子弟教育のためにまとめた童蒙教訓書。従来より書名が伝わるのみで、詳細不明であったが、近年その原本が発見された。全7篇1冊で、1篇「教育」、2篇「立志」、3篇「忠告」、4篇「兵道」、5～7篇「稽古」から成る。平和な社会と民生の安定こそが武士の存在理由とする「止戈」説に基づき、徹底した修己と武人教育を説く。

\* 伊南芳通は、兵法家・会津藩士。寛永4年(1627)7月生、享保2年(1717)5月11日没(墓は会津願成就寺)、享年91と長寿であった。初め佐藤氏で、杉本氏も名乗る。名、芳通。通称、初午・与八郎・与八・瀬兵衛。号、半庸軒りおうすしよ醜翁。図書と称す。子供の頃から武芸に秀で、江戸で甲州流や謙信流などの諸武芸を修めた後、寛文元年(1661)に会津に戻り、初代藩主・保科正之ほしなまさゆきに仕えて楠流兵法かようりゅうの一つ「河陽流」の普及に尽力。河陽流は元禄年間以後80年以上も会津藩軍制の基本とされ、天明8年(1788)、長沼流変更後は衰退したが、修己や慎独しゅうこしんどくを重視し、己を捨て忠義を貫く楠流兵法は会津精神の形成に多大な影響を与えた。

\* 文献上の「教育」の用例は、『孟子』尽心章句上ちんしんしんしやうくが最古だが、同書では「国家による人材育成」の意味で使われている。『日本国語大事典』(小学館)は「教育」を「知識を与え、個人の能力を伸ばすためのいとなみ。現代では、一定期間、計画的、組織的に行なう学校教育をさす場合が多い」と説明する。しかし、江戸の医者・千村拙庵が元禄元年(1688)序『小児養生録しょうじようじやうろく』で「三つ子の意は百になるまでとをるといひ伝れば、いよいよ教育をつしむべし」と幼児教育の重要性を説き、常盤潭北とぎわたんぼくが享保19年(1734)序『民家童蒙解』4巻「教育」章で庶民家庭の育児の要諦を縷々述べているように、近世の育児書では「家庭教育」としての用例が古い(『武小学』も同様)。

\* 序文で、自ら「止戈学士しごがくし」と称するが、これは、漢字の「武」が「止戈」、すなわち「戈を止める」と解釈する説で、『春秋左氏伝』の宣公12年(前596)に「戈を止むるを武と為す。…夫れ、武は暴を禁じ、兵を戢め(武器をしまう)、大を保ち、功を定め、民を安じ、衆を和らげ、財を豊かにする者なり(武の七徳)」とある(ただし、野中日文著『武道—日本人の行動学』は、「武」は「槍をかついで歩く」姿を意味し、あくまでも「実力行使」が本来の意味で、止戈説を二次的な解釈とする)。日本では『春秋左氏伝』等の影響を受け、「止戈」説が長く支持され、『武小学』も「止戈」説に基づき、『礼記』『論語』『春秋左氏伝』『易経』等を引きながら、武士子弟の教育の要諦を次の7篇に綴る。

【第1篇「教育」】胎教・出産時の儀式や幼少からの教育。

【第2篇「立志」】武士にとって立志は極めて重要で、立志で方向性が大きく変わる。少しでも義に志せば士道にかなうが、少しでも利に志せば士道から外れる。義・利の二つは武士の吉凶に関わる一大事である。

【第3篇「忠告」】忠信は徳に進む所以である。常に自己啓発を怠らない君子は、常に天とともに存在する。

【第4篇「兵道」】天地の間は一理であって、文武もまた一つ。武は儀刑(模範)によって天下を治めるもので、①暴を禁じ、②兵を戢め、③大を保ち(大国保全)、④功を定め(君主の功績)、⑤民を安じ、⑥衆を和らげ(人民和睦)、⑦財を豊かにする(経済繁栄)ことを「武の七徳」という。

【第5篇「稽古」】武士の指導者は法と礼とを兼ね備えなくてはならない。戦いくさでは大将が決断力と強靱な意思を示し、兵士がその命令に服従することが礼である。

【第6篇「稽古」】人為的な嶮岨(城郭等)を設けて国と人民を守り、天下平定後も有事を忘れずに軍備を備え、絶えず軍事演習を行って強化せよ。兵士教育では礼儀と忠信を重視し、規則や賞罰でその行動を習慣化せよ。

【第7篇「稽古」】射儀(弓道)では身の動きが必ず作法にかなない、心身ともに正しければ、弓矢も正確となり、初めての的に当たる。武士が「武」を学ぶのは、あくまでも君を輔けて政を修め、天下を衛り、非常を禁めるためである。



## 【序文】 \*PDF「武小学」2-5コマ

まず序文で、次のように、武士の存在理由と本書執筆動機などを述べる。

- 「武」という漢字は「止戈」の二字から成る。今はまさに干戈(戦争)が止んで天下は安泰である。これは武士が人民の長とされる所以であり、武士による天下安泰の功績が古来より尊ばれてきた。しかし残念なことに、最近の兵法家は「武」の真理を知らず、単なる戦闘や奇計、戦利得失のことと考える者がいる。
  - 士の士たる所以は、君に仕え、天下を守るの一事にある。そのためには、まず、己の心を正して身を修め、十分に君に仕えることである。君に良く仕える事を知れば、天下を守る道理も明らかになる。天下を守る事を十分に理解すれば、君に仕える気持ちもますます強くなる。
  - ここに後世のために、密かに諸書から抜粋し、河陽流に有益な事柄を集めて数篇にまとめ、『武小学』と題した。身の程知らずの不謹慎との誹りを受けるだろうが、本書が、童蒙を啓発し、臆病者を励まし、己の職務を弁え危険な任務も遂行するうえで多少の助けになれば幸甚である。
- 貞享内寅春の日 止戈学士 伊南杉岸清芳通書。

## 【本文】 \*PDF「武小学」5-10コマ(本文第1章「教育」の要所)

『武小学』の冒頭に「教育」篇を掲げるのは、本書が武士子弟の育児書であることを示すとともに、同篇が全体を貫く総論に位置づけられているからで、その要点は次のようなものである。

- 昔の人の育児は至って謹厚(注=慎み深く真面目で温厚なこと)である。溺愛ではなく、養い育てて先祖を嗣がせるからである。そのため、妊婦の起居進退・視聴言動を慎み、常に仁愛・忠信に即した生活をさせる(胎教の重視)。
- 男子誕生の際、桑弧蓬矢(注=桑の弓で蓬の矢を射て子供の将来の雄飛を祈る)や射除鳴弦(注=弓の弦を鳴らして邪気を払う)の儀式を行えば、正神が内に止まり、邪神が外へ逃れ、子供が端壮・勇健になる。誕生後は、規律正しい守り役や乳母を側に置き、子供の成長に従って順序よく教える。
- 自分で物を食べるようになったら右手を使うことを教え、言葉を話すようになったら応答の仕方を教える。幼児に物事を教える時には常に嘘がないように気を付ける(誠の教育)。立つ時には必ず正面を向き、人の話は姿勢を正して聴くようにさせる(敬の教育)。
- 程子は「幼童を教ゆるの方、予めを以て先とす」と言った。先入観がない白紙の子供は物事を判断することができないため、この時に正しく教えずにはならない。しかし、いったん先入観が出来てしまうと容易に教えることはできない。前者の「未発の教育」は人間教育の秘訣であり、そのタイミングを逸した「已発の教育」は扞格(意見がかみ合わず互いに相手を受け入れない)して堪え難いものとなる。
- 孔子は「人を真に愛せば、あえて苦勞をさせ、育てずにはいられないだろう。人に対して真に忠実で真心を注ぐならば、教え導かずにはいられないだろう」と言った。
- 『礼記』内則篇に「6歳で数と方角の名を教え、7歳で男女の席(むしろ)を区別する。8歳で門戸の出入り、着席、飲食の際に、目上や年長者に遅れる(先に譲る)ようにする。9歳で暦の日の数え方を教え、10歳で家を出して外の教師につかせ、余所の宿舎で生活させ、書計(読み書き算)を学ばせる」とある。同じく「冠義篇」に「およそ人の人たる所以は礼儀である。礼儀の基本は、まず姿勢を正しくして、顔色をまじめにし、言葉遣いを順当にすることである。これができてこそ礼儀がよく行われ、それによって、君臣の道が正しく行われ、父子は親しく、長幼は和やかになり、礼儀が完成する」とある。
- 河宇田醉庵先生(作者の師)は曰く、「武士の子育ては必ずしも書を学ぶだけではない。絶えず良将・勇士の故事、哲人・賢人の金言・制誨などを朝晩の慰みとして聞かせ、その義理・忠節・羞恥・利鈍等を吟味させよ。また、俗説・和説・樵談・興贊などの折々にも理非や心を教え、従容(注=ゆったりと落ち着く)として義理を明らかにすれば大きな器になる。今の人々の育児は、不義・非礼が多く、子供の我が侷を許すのが愛情だと思っている。これではどうして立派な武士に育つであろうか」と。

以上のほか、7歳以後は野外で体を動かす武芸や運動に近い遊びをさせ、有能な武士の話を聞かせることや、15歳以後に飲酒・色欲を戒め、悪友を遠ざけることなどを諭す。

\* 第2篇以降は武士特有の内容が中心だが、第1篇には『礼記』の年代別教育論や『漢書』の「先入主(注=先入観。最初に覚えたことが固定観念となり、その後の思考を束縛する)」観など他の育児書と共通する内容が目立つ。総じて本書は、君主に仕えて泰平の世を実現するという大志を持たせ、それが自己修養から始まるという修己治人(しゅうごちじん)を明確に示したもので、人間教育の根本が万古不易(ばんこふえき)であり、その基本の上に武士特有の教育を施すことを教えている。それを端的に示すのが次の序文の一節であろう。

武を業とする者は、先まず己を修めずんば有らず。己を修めて而して君に事え、徳行家に伝わり、天下に刑のつとる。是を以て、世治まり、民泰たみゆたかなり。世治まり、民泰かにして、而して後に武の号称せらる。

平和な世の中と民の豊かな生活が実現できなければ、為政者として賞賛されることはないという戒めは、現代人(特に政治家)が噛みしめるべき至言(しげん)であろう。